

憧れの男

有坂 広一

今時、暴力を賛美する手合いはいない。が、司書の深見恭子は女らしくもなく、殴ってやりたい奴がいてウズウズしている。そいつは本館の吉田悦郎である。彼は政治力があり、人間関係を築き上げるのが巧みだから、大抵の職員は迎合している。もつとも中には吉田路線から外れたり、立ち向かったりする異端もいないわけではないが。恭子は最近オーブンしたばかりの滝山図書館の勤務で、吉田と一緒にならなくてよかったと思っている。同じ頃に職員になった佐野ちゃんがふと漏らしたことがある。

「俺、正直言つて、吉田さんつて、好きじゃないなあ」

「えっ、ほんと？」 恭子は意外だった。

「深見さんは彼に好感を持っていてでしょう」

「とんでもない、大嫌いよ」

恭子は珍しく本音を口にした。佐野ちゃんはオヤという顔つきをしたが、彼よりも恭子の方が驚いた。佐野ちゃんこそ吉田サイドの一員で、忠実な家来のよう

に振る舞っており、反抗したことがないからだ。

「吉田さんに嫌われたら、ここにいられないからね」

「それはそうね。でも佐野ちゃんは偉いわね」

「仕方がないよ」

恭子は佐野ちゃんをほんの少し好きになったけれど、それは表面的なことで、内心では軽んじていた。何かにつけて人が良すぎるのが物足りなかった。同僚の買物まですることはないので、それでも、

「見直したわ」

恭子は感心の体である。

「それは嬉しいですよ」

「あなたの本音が分かっただけでもよかったわ。私の同志よ」

「深見さんは彼のどういうところが嫌いなもの」

初めて吉田を見た時、中学校の理科の大林先生に似ていると思った。恭子は理科の時間はいつも耐えている。十年來の大学ノートから黒板に書き写し、その上、平板な口調で話すから退屈でならなかった。もつとも

これくらいで嫌いになったわけではなく、要は相性が悪くて、理由もなく疎んじられていたからだ。反感を覚えて時々教科書に文庫本をはさんで読んだり漫画を描いたりして、憂さ晴らしをした。しかしこれらのことは皆ばれていて、しかし先生は一度も注意をしなかった。担任を通して何か言ってくることもない。けれどもついに反動が降りかかってきた。それはこういうことだ。その日は教科書を順番に朗読する際に、恭子の時だけは名前を口にできなかった。明らかに意図的に無視しているのだが、どうしていいのか戸惑うばかりだった。その時、後ろの席の美佐に背中を突かれて立ち上がり、何も言われないけれど自分から朗読した。これほどの屈辱はなかった。学校の帰り、美佐が慰めてくれた。

「先生はうつかりして、名前を忘れただけなのよ。気にしない方がいいよ」

「うん、平気」

恭子はどうか涙を抑えた。それ以来、大林との間に暗闘が繰り広げられた。嫌いな教師は他にもいたが何と言っても大林をダントツに憎悪していて、いつか復讐してやるつもりでいた。が、できるはずはなく空想するにとどめた。それは毎晩のように強力な殺虫ス

プレーで目鼻や口に思いつき吹きかけてやり、大林を苦しめてやることだった。

一ヶ月ほどしたら、今度は美佐が被害者になった。指名されて教科書を読まれたのだが、その途中、先生は痲癩を起こしたように、

「ちよつと待て。ラ行の発音がなっていないぞ」

陰湿な声で叱った。美佐はラ行を口にすると濁った不明瞭な発音になるが、聞き取りにくいほどではなく、他の先生や生徒から指摘されたこともなかった。

「鼻にかからないように発音するんだ。さあラ行を言うてごらん」

「はい、ラ・リ・ル・レ・ロ」

美佐の声は委縮していた。

「そうじゃない、そうじゃない」

「ラリルレロ、ラリルレロ、ラリルレロ……」

何度も言われたが、いくら繰り返したところですがに治るものではない。教室の中は繰り返し返り、涙声の美佐を生徒達は気の毒そうに見守っていた。美佐は最後には怒ったように黙って座ってしまった。一緒に帰る時、理科の時間のこととは話題にできなかったけれど、美佐の家の近くで別れる時、スプレーで空想したことを話してやった。

「いいアイデアね。私も帰ったら、そうしてみるよ」

「本当は実際にやってみたいけどね」

「そうね、実際にね」

「じゃあね」

「バイ、バイ……」

お互いに笑いながら手を振り、恭子は友達の実笑みを見て少しほっとした。美佐は二人兄妹で、年の離れた兄は高校を出て自動車整備工場で働いている。ヤンキー風のおしゃれが好きで以前に遊びに行った時、極彩色のジャンパーを着ており、よく似合っていた。優しい話し方をし、ベルギー製のチョコレートをくれたのを覚えている。恭子の田舎は静岡で、滅多に雪は降らないが、珍しく大雪になった日があり、快晴の日が続いても容易に溶けなかった。至る所に固まりがあったがそれらは徐々に消え、一つだけ廃屋の目陰に残っているのがあって、それは巨人が寝そべっているように見えた。その日、恭子はまだ巨人がいるかどうか確かめに行く、かなり溶けて骸骨のようになっていた。その先に行く公園があつて、男達が争っていた。恭子は林に囲まれたベンチに座ってこっそりと見た。すぐに大林先生と美佐の兄ということが分った。美佐の兄が一方的にがり声を立て、キックボクシングの格

好で威嚇し、それから本当に殴りだした。先生はふらつき気味になり色白の顔から血が噴き出た。恭子は戦慄を覚えながら美佐のお兄さん、やるわねと感動した。二人は勝負がついたのか間もなくなくなった。それから再び巨人の残骸を見て帰路についた。ついでに大嫌いな数学の先生も血まみれになったらどんなに痛快だろう、悪い奴は報復されて当然だ——恭子は興奮してのぼせていた。もともテレビのプロレスやK-1を好んで見る方だった。流血騒ぎになると熱狂して悪人面したレスラーに、

「もつとやれ！もつとやれ！」

声援を送った。高校生になると、父の書齋からさまざまな本を漁るようになった。殺人者のことを書いた心理学書があり、食い入るように読んだ。刑に服した殺人犯にファンレターを出したり、結婚を申し込んだりする女もいるというのがあって、恭子は自分の同類を見出したような思いがした。

上京して短大に入ると、アルバイトをして学費や生活費を稼いだ。ボーイフレンドもできた。彼は偏差値の高い大学の学生で、地方の金持ちの息子らしく、貴公子のような趣があった。処女を与え惚れさせたら結婚を申し込んできた。けれども恭子にしたら物足りな

かった。メールにしても二枚目意識過剰の文章を書いてよこすのだが、こんな都会的な繊細さなど、窮屈なだけで燃えるものがなかった。

レスラーのような堂々とした男はいないのか、そんな男に出会ったら最高だろう。図書館に勤めるようになったが、仕事を覚えるのに精一杯で、それどころではなかった。勤め出して二ヶ月ほどした頃、本館の岡本理恵から電話があった。岡本さんは上品な美しい女性で、いずれ滝山図書館の館長になる人だった。

「あなたと同期の司書の女性が、そちらに配属になりました。相談しながら仕事をして下さい。さしあたり今日挨拶に伺わせます」

という伝達だった。新入りはどんな女だろう、好感が持てるに越したことはないけれど、気の合わないのは御免だ。午後から現れたのは黒縁のメガネをかけて、小柄でずんぐりした、到底美人とは言えない女だ。

「お目にかかっていますよね」高野佳代はまん丸な顔にはじけるような笑い声を立てた。

「お互いに知っているわね」

「私、未経験者だけど、よろしく」

「私こそ何も知らないに等しいわ」

それから高野佳代は十分ほど喋って書庫や閲覧室を

見て帰って行った。彼女は元中学教師で気の強そうな顔をしていて、それが印象に残っており、違和感を覚えた。公開講座の小講堂では目立つ存在で、原色の派手な身なりをしていて、いつだって最前列の席に座り、常に友達二三人を手兵のごとく引き連れていた。高野佳代が帰ってから用務主事の酒井勇が何か言いに来た。「新しい人と、よく話し合ってやらなきや駄目だよ」

「話し合ってやらなきや駄目だって。あなた、私の上司じゃないのよ」恭子はカッとなった。「それに駄目だよ、なんて否定形でものを言うなんて、失礼よ」

さらに癪に障ることを口にした。

「今の人、仕事ができるらしいね」

「そんなこと、用務員さんには関係ないでしょうが」

「そう向きにならないですよ」

「何かとうるさいからよ」

恭子は激しい口調で言い返す。いっそのこと五十男の酒焼けした顔面にパンチを浴びせてやりたいくらいだった。酒井勇が図書館に勤めるようになったのは、地元選出の代議士の紹介だと自分から話した。如何にも上に弱く下に横柄そうな木端役人風情にしか見えな

い。

「これから干渉がましいことは一切言わないで下さ

い」

恭子は注意しておいた。滝山図書館ではもっぱら本を選ぶ作業をしていた。職員は三、四人しかいなくて、何かにつけて高野佳代と一緒だった。恭子より三歳上の二十九歳で、もっぱら恋人を探しているところらしい。安直ながら人生に対して前向きに立ち向かっている。ウクレレを習い、都内を探訪し、詩集を刊行しようとしたり：生命力が旺盛なのか、行動的に振る舞い、それが鬱陶しかった。インテリジェンスを強調するあまり、空疎な論理癖でものを言うのが空々しかった。表向き対立するようなことはなく、できるだけ歩調を合わせて仕事をしている。だいぶ慣れた頃、一緒に帰りながら佳代から話を聞いた。近いうちに本館が改築になるらしく、その間職員達は二つに別れて滝山にも来ることになっていると言う。恭子も薄々知っているが詳細は聞いていない。七、八人の予定だが、その中に吉田も入っているそうである。

「今の方が静かでいいわ」恭子は嫌そうな顔をした。

「本館の職員と話が出来て、楽しいわよ」と高野佳代。

「格好いい男性がいるかもね」恭子はからかった。

「それは見ての楽しみね」

「高野さんは結婚願望、強いでしょう」

「それは、あるわよ。恭子さんは恋人いるでしょう」「前にはいたわ」恭子は打ち明けた。「二年間、一緒に住んでいたの」

高野佳代は呆れたとも、先手を打たれたともどちらとも言えない顔つきをした。多分後者だろう、そうだとしたらいい気味である。恭子は面長のシャープな顔つきをしており、笑顔がいいと言われていて、男にはもてた。佳代などとは比べ物にならないはずだ。いや比較すること自体不本意である。上中里駅についてプラットホームで別れる時、

「私、岡本さんがいらつしやるのが楽しみなの」恭子が言うとき、

「それは同感ね。あの方、素敵よね」佳代も微笑む。

「ああいう大人になれたらいいわね」

「私もそう思うわ」

この点では二人は一致した。

本館の職員達が二つの分館に配置されたのは四月だった。恭子は司書になって三カ月が過ぎており、四人しかいなかった滝山図書館は人数が増えて賑々しくなった。力関係を見てどう振る舞うべきか見直さなければならぬ。用務主事の酒井は有力者の間をちよこち

よこして政治的な動きを観察している。すでに党派が出来ていて、言うまでもなく吉田が仕切っている。年は三十二、三歳で誰よりも重きを置かれ、次席の石山までもが追従している。恭子の印象では吉田は粒が小さく、しかも少し短気な威張ったところがあつた。彼の私設秘書ともいふべき存在が四十年配の安原豊子で、知性とは無縁のガサツな女だつた。若い女達が気さくな安原と親しんでいるのは彼女の背後に吉田がいるせいだ。恭子はこんな女には好意は持てなかつた。

お人好しの佐野ちゃんは、彼らに対しても買物役を果たしていた。恭子にも、「深見さんはいいですか」と聞いてくれた。大抵は断るのだが、そのうち頼むようになり、それが習慣になつた。色々の動きの中でやはり館長になつた岡本さんは異彩を放つていた。年は四十に近いが、若々しくて気高さが漂つていた。

ある昼休み、図書館の近くにある庭園へ高野佳代と見物に出かけた。ここは旧財閥が寄付した施設で木々や花が多く咲いていて、見応えがあつた。コンドルの設計した洋風の建物を見て回つてから売店の椅子に座つて雑談した。

「大した男、いないわね」恭子はジュースを一口すす

「中谷さんなんか、真面目でいいわ」

「ほら、出た」

「予想していたみたいね」

佳代は声を立てて笑つた。彼女を図書館公開講座で見た時は、陰気な暗い性格だと思つたが一緒に仕事をするとよくなる、明るい感じがよく笑うほうだつた。もつともその笑い方はややヒステリックな感じがするのだが。

「真面目なら、いいつてもんじゃないわ」

「でも顔立ちが悪くないわよ」

「私、あの手は好きじゃないの」

「恭子さんが好きでなくてもいいわ」

佳代は棘のある口のきき方をした。前からそういう傾向があり癪に障つた。この棘は気にいらなくて、いつまでも慣れることはなかつた。最初に見た時のような陰気な感じが佳代の実体かもしれない。

「お気に入りになら、高野さん、付き合えば」

「私、自信あるわ」

「中谷さんは三十過ぎだから、年齢的に合うみたいだし、総体的にいい線いつているわ」

「恭子さんがそう言うってくれるなら、間違いないわね」

「お似合いのカップルかもね」

佳代は嬉しそうにまた笑い声を立てたが、恭子ははらかつていただけだった。いくら自信があつても相手あつてのことだ。と言つても中谷を肯定しているわけではなく、むしろ彼のどこがいいのかさっぱり分らない。生彩というものがなく、性的な魅力が感じられない。しかし佳代はこのレベルでも愛されることはないだろう。

「ああいう男性つて、こつちから攻めて行つた方がいいわよ」

「同感ね。私もそう思う」

「男は女の体が欲しいものよ。狙いはそこね」

「あなた、いっぱいしのことを言うけど、経験豊富な」

「たいしたことないけど、適当にやっているわ」

「悔しいわ、私、負けたな」

「そんなことないよ、佳代さんつて可愛いから、男つて抱きたがるわよ」

「グワツハハハ…」

佳代は褒められると、嘘でも喜んでしまう単細胞らしい。「好きな男とのセックスつて最高ね。佳代さんも早く中谷さんに抱いてもらおうといいわ」

「やがてそうなるかもね」

「もちろん、そうなるわよ。だって、あなた素敵だもの」

そんなことはあり得ないのだ、いつまで経つてもまっさらな処女のままだろう、せめて妄想して一人で楽しんでいればいい：そんな話をして以来、佳代の動きが目に見えて活発になり、二人であちこちに出かけるらしく、佳代の話によると結婚もあり得ると言うのだ。恭子はそんなことは百に一つもないと思う。中谷は彼女がどんどん前に出て来るから断り切れないだけで、佐野ちゃんを昼飯に誘った。

「えっ、どういう風の吹き回し？」

彼は不思議そうな顔つきをした。

「いつもお買物をしてもらつて、迷惑をかけたりにしているからよ」

「何でもないよ。買物くらい喜んでするよ」

図書館から十分くらいの店だが職員達は来ないから穴場になっていて、そのスパゲティは安くてボリュームがあり、佐野ちゃんにはもってこい。通り道に咲いている紫陽花を眺めながら歩いた。

「このお店よ」

中に入りテーブルに座ると二人ともボンゴレを頼んだ。テーブル越しに見る佐野ちゃんはどっしりして、頼もしげで、それでいて何だか滑稽感があり、からかいたくなった。

「佐野ちゃんは身長、どれくらいあるの」

「メートル七十六センチ」

「私より十一センチ高いわ」

「深見さんは女として上背はある方だね」

「でも体重はかなわないわね。相撲取ったら押しつぶされちゃうわね」

「一度、お手合わせ願いたいね」

「いいわよ」

恭子はテーブルの下から脚で、佐野ちゃんの膝を撫でた。

佐野ちゃんは不精髭の残った表情を崩して笑った。

笑うと案外可愛い。北海道の農家に生まれ、通信教育の大学を卒業したとかで、頭の良し悪しは分からないけれど、要領の悪いことは確かだ。

「佐野ちゃんは恋人いるの」

「いない。でも困るよ、今、足で触られて感じているんだから」

「敏感ね。辛抱しなさい」

「いつかお願いします」

「さあね、うふふふ」

「中谷さんも恋人いないけど、臨時に高野さんと付き合っているよ」

「まったく羨ましくない話ね」

苦笑しながら言い、中谷さんは無理しているわね、と付け加え、そして佐野ちゃんは高野さんをどう思うかと聞いた。

「自己顕示欲の強い性格だね」口をもぐもぐさせながら答えた。

「魅力のなさの裏返しよ」

「深見さんはああいうキャラ、好きじゃないみたいだね」

「そうよ」

「ははは。何となく分るね」

「彼女、私立大学の図書館を狙っているみたいよ」
恭子は残りのパスタを巧みにフォークで巻いた。

「見るからに野心家って感じね。凄く鼻につくわ」

「それは目につくね」

話しながら食べ終わって、一息ついてから店を出た。図書館に向かいながら佐野ちゃんがやや怒った口調で

「この間、吉田のことで頭に来た」と話し出した。奴

に騙されて区役所のある女性が俺に会いたいと言って
いるらしくて、そこへ行ったら嘘だった。こういうよ
うなことは前にもやられたと言うのだ。

「馬鹿にしているのよ。怒った方がいいわ」

「でも、この中心人物だから、下手すると、俺の居
場所がなくなってしまうよ」

「大丈夫よ」

「いや、それが一番怖いよ」

「私、普段から思っているんだけど、佐野ちゃんって、
どうして使い走りなんかやっているのよ。そんなこと
止した方がいいよ」

「自分の弱点をカバーしているんだよ」

「弱点は誰でもあるわよ」

「じゃあ、余計なことかな」佐野ちゃんはちよつと腕
を組む。「深見さんのせつかくのご意見だから、考え
ます」

「そうよ、やめな」

「今日のご馳走様でした」

佐野ちゃんは無邪気にお礼を言った。

高野佳代は就職活動の甲斐があつて某女子大の図書
館に正式の職員として採用され、七月の終わり頃に務

めだすと時々滝山にも姿を見せた。中谷に会うのが主
目的だが同時に元同僚達にグレードアップしたところ
を見せたがっているのだ。いつだったか、佐野ちゃん
と立話をした。佐野ちゃんによると、佳代の中谷への
攻勢は加速度を増していると言う。中谷のアパートに
夜遅くビルやウイスキーを持参して訪ねて来、ダン
スをせがんだりするそうだ。そんなことを親しい中谷
から聞いたと言う。

「佳代さんは、よっぽど中谷さんが好きなのね」

「だけど、中谷さんは全然立たないんだって」

「何よ、淑女の前で」

「アツ、ごめん、ごめん」

「まあいいけどさ。本当は好きじゃないんだから、仕
方ないわよ」

「佳代さんは、彼の真実の気持ちに気がついていない
んだ」

確かに一人芝居をしているだけである。二、三日し
て佳代から恭子に電話がかかって来た。

「私、中谷さんに自分の気持ちを打ち明けたの」

「感触はどうだったの」

「彼ったらウジウジしていて、意思表示しない人なの。
心配だから安原さんにもお願いして、話してもらおうこ

とにしたの」

恭子はその安易な解決策に軽蔑の気持ちしか湧かなかった。あんなお節介焼きに頼んでもラチが明かないだろう。

「安原さんなんて仕様がないわ」

「でも、打つべき手は打っておいた方がいいからさ」
何を血迷っているのだろう、安原は親身になってくれるような女ではない。恭子はイヤな女という印象しか抱いていない。家庭は十歳年上の夫と高校生の息子がいて幸せそうに過ごしており、時々のもろけたりするのだが、恭子はそれがどうしたのと言いたいくらいだった。しかし佳代にしたらふさわしい相談相手かも知れない。

「ご健闘を祈るわ」恭子は表向きのエールを送っていた。

「私、恋人同士になったら、郷里の親達に見せに行くの」

(甘いなあ)

それしか感想はなかった。

三日後、恭子は池袋のカフェで佐野ちゃんと会って中谷が安原豊子から説得された話を聞いた。中谷は事細かく報告したらしい。彼は自分の体験を友人に話す

のが好きな性分でもあった。恭子はアイスコーヒーを飲みながら佐野ちゃんの話に耳を傾けた。中谷の話の再現は興味深いものがあつた。

「高野さんが中谷さんのことを、頭の天辺から足の先まで、好きだとおっしゃるのよ。全身炎みたいに燃えているともね。ねえ受けとめてあげて。仕事はできるし、料理も家事も何でもござれよ。先生をやっていたくらいだから、頭はいいし、性格は明るくて社交的ね。それに夫にとことんつくすタイプよ」

「絶賛しますねえ。世界一って感じ」中谷は冷やかしか味になった。

「それに佳代さんは何よりも貞淑なの」

「ああ云う女性が貞淑でなかったら、価値なんてないですよ」

「何を言うのよ。今の時代にそういう女性は少ないのよ」安原は強調した。

「そうかなあ」中谷にはどうでもよかつた。

「さあ、どうしましょう」

「どうもしませんよ」

「私の立場もあるわ。いい返事を聞かせてあげたいのよ」

「立場は関係ないと思うけど」

「中谷さんの本心はどうなの」

「好意は持っています。手を握ったわけでもないし」

「だって中谷さんがお酒を飲ませて、ダンスをして、体を押し付けられたとか聞いたわ」

「そんなことしないよ」

「愛していきや、できないものね」

「彼女の積極性に押されただけで、ぼくが申し込んだわけじゃない」

「本当なの」

「嘘じゃない」

「でも中谷さん、真摯に受け止めてあげてね」

中谷は自分の気持ちは決まっているのに安原に翻弄されて明快に断りの返事が出来なかつたのだろう。佐野ちゃんの話が終わると、恭子はいつそう興味をそそられて質問し、更にコーヒーを買って来て飲み、一時間半ほど過ごした。

二人の話は日を待たずに広がった。佳代は口止めしただけだが、お喋りの安原は耳寄りな情報として皆に暴露した。職員達は下世話な話を喜ばないはずはない。用務主事の酒井はさっそく中谷に、

「高野さんの話を聞きましたよ。結婚するんだって

ね」ニヤニヤした。

「俺はそんな話はしていないよ」

中谷はつつけんどんに言い返した。

「隠さなくてもいいじゃないの」

「あんたのようなシモベに言われる筋合いはない」

「シモベだって！」

道化者の酒井はムツとした。そこへ松葉杖を突いた原島が来て、

「少子高齢化の社会です。結婚して子供をたくさん産むのはいいことです」

バカなことを言った。彼は共進党のシンパらしくて何かと生半可な理屈を口にする男だった。中谷が無視していると石山次席に呼び止められた。「高野さんは最高の女性だ。あんたにぴったりだ。いい奥さんになるよ。ねえ悦ちゃんもそう思うだろう」

「お似合いですよ。中谷君、潮時だから、身を固めた方がいいね」

そこへ吉田の友人のトラック運転手が来た。いつだって爪は垢で真つ黒だし髪だつてもしやもしやだった。

「中谷君、聞いたぜ。こないだ話はない。あんた、肉親と縁の薄い不幸な育ち方をしたと聞いたけど、高野さんだったら幸せになれるよ」

中谷は顔を歪めた。皆の前で侮辱同然の言葉を吐いたことが許せなかった。

「そんなにいい話なら、あんたが結婚すればいい。忠告しておくけど、プロポーズする時は爪の垢を取つて、ついでに髪を洗った方がいいよ。臭くてかなわないよ」

中谷は憎々しげに毒づいた。

「それに、知的な現場にフリーパスで顔を出すのは迷惑だ」

「吉田君の許可を受けているよ」

「凄い味方がいるね」

「労働者を馬鹿にしないでよ」

「私は労働者を尊敬しているよ。あんたを尊敬しているかどうかは別だけど」

吉田の友人はプリプリしてどこかに行ってしまった。

「安原さんはひどいなあ。皆喋っちゃうんだから」中谷は呟いた。その安原は休んでいられる。恭子はこんなインチキ臭いやり取りは黙っていられたかった。

「中谷さん、あなたは高野さんを好きじゃないんだから、はつきりお断りすればいいのよ」

「ああ、そうするよ。皆の前で弄ばされるなんて、こんな迷惑なことはない」

中谷が職員達をぐるりと見渡して睨みつけると、一陣の風が通り過ぎたように静かになり、皆も後味が悪そうだった。

中谷はその夜、佳代に電話して言葉をつくして断つた。恭子は佐野ちゃんからその一件を聞いて、「当然よね」と安らいだ笑顔を浮かべた。

「中谷さんは皆の嘘っぱちの善意に怒っていたよ」

「からかっているだけだもんね」

「素敵でもないのに素敵と言ったりしてさ」

恭子も佳代に同じようなことを言つて苦笑いをした。

九月の中旬、滝山図書館は整理日に入った。職員達は閲覧者がいないせいとか、のんびりしている。昼休み、安原豊子が離婚したという話になった。夫は別れた後体調を崩して入院したが、安原は一度も見舞いに行っていない。長い間、冷え切っていて、その間、仮面夫婦を演じていたから、見舞いなど必要ないのだろう。恭子はあるような話だったから驚きもしなかった。皆も知っていて興味がないのか、話題はすぐに途切れた。

佐野ちゃんが、「俺、買物に行つてくる」と外に出ようとしたら、吉田にも頼まれた。「いいですよ」と彼は気前よく引き受けた。佐野ちゃんのお人好しぶりは直らないらしい。十分ほどしてコンビニから戻つて

来た。

「あれッ、変だな」吉田が声を立てた。

「どうかしたんですか」

「俺、こんなもの頼んだ覚えはないぜ。それに釣銭が間違っている」

「チョコ入りの菓子だと思っただけ、釣銭はいくら足りないの」

「六十円だよ。ちゃんと確認したのから」

「もちろんですよ。俺、数字に強いから」

「何言ってるんだ。お前いい加減だな」

吉田は「ご機嫌斜めなのか、すでに怒った口調である。よく見てよ。少しくらい間違っただものを買って来たからと言って、文句言わないでよ」

「別なものを買って来て、お釣りまで間違えているなんて、なっていないぞ。買い直して来いよ」

「言わせてもらおうけど、俺、吉田さんの使用人じゃないよ」

「使用人じゃないって……」

吉田はいきなり釣銭を投げつけた。故意なのかどうか、佐野ちゃんの顔に当たった。佐野ちゃんは険しい顔つきをして怒りだした。彼がこんなに激怒しているところを見たことがない。

「なんだア、この野郎」彼は奇声を発しながら吉田に突進して行った。「てめえ、何をしやがる。人の顔を物をぶつける奴があるか」

恭子は胸が激しく高鳴った。

「吉田、立て」

佐野ちゃんは吉田の胸倉を掴むと、椅子から引き上げ、部屋から連れ出そうとした。

「佐野さん、暴力はダメよ」

岡本館長が部屋に入って来て注意をした。が、佐野ちゃんの勢いは止まらなかった。ぼんやり突っ立っていた原島とぶつかり、松葉杖が転がって、棒切れのように瘦せた体が床に横転した。佐野ちゃんは見境がなくなっていた。

「クソッ、障害者を何と思ってるんだ」

原島は職員に助けられながら立ち上がった。吉田は廊下に引つ張り出されて殴打された。恭子は殴る音を聞きながら小気味が良かった。

「佐野さん、冷静になりなさい」

岡本さんは巨体を引き放すようにして倒れそうになり、その瞬間、スカートがまくれてフトモモが覗いた。上品な女の振る舞いに男共はどきりとした。

「岡本さん、吉田さんが悪いです。あんなことをされ

たら、誰だつて怒ります」

恭子が声を放った。

「それなら言葉で言いなさい」

「佐野ちゃん、岡本さんの言う通りにして」

恭子も止めに入った。吉田の額が割れて真っ赤な血が流れ、鼻血も出した。佐野ちゃんは返り血を浴びて衣服や顔のあちこちを汚した。仰向けに倒れた吉田が起きようとすると、岡本さんがそばに寄つて来て、

「大丈夫？今すぐ、救急車を呼ぶから」

声をかけてからスマホを取り出した。恭子は給湯室に行つて、湿ったタオルを手にして廊下に戻ると、佐野ちゃんの顔や鼻や口を拭つてやった。

「俺、殺意はないよ」

佐野ちゃんが言い訳をした。

「誰も死んじやいないわ。もうすぐ救急車が来て、負傷者を運んで行くわ。でもあんたはクビよ」

「分かっているよ」

「後は私が面倒を見て上げるから、心配しないで」

佐野ちゃんは頷いた。五分後に救急車が到着し、吉田はストレッチャーに乗せられ、そしてパトカーも駆けつけた。佐野ちゃんは手錠をかけられたものの、プライドを回復したのか平然としている。恭子は一連の

動きを眺めながら熱い高揚感が湧き出て来るのを覚えた。滝山図書館はしばらく暴力行為の話題で持ちきりだった。佐野ちゃんの行為は非難されたが、それ以上に吉田の方が陰で悪口を言われた。恭子は佐野ちゃんの腕力に憧れに似た気持ちを抱きながら、

「刑務所から出てきたら、私を思いっきり抱いて」
心の中で叫んでいた。

初稿、じゅん文学60号、平成21年7月